

神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅶ

－中期後葉期 加曽利E式土器文化期の様相 その5 文化的様相(3)－

縄文時代研究プロジェクトチーム

I. はじめに

今回の検討は、平成12年度から開始した中期後葉期・加曽利E式土器文化期の様相をめぐる研究の5年次目にあたる。これまでに、「主要遺跡の集成及び重複・一括出土事例」の検討、「土器編年案」を提示し、竪穴住居址・柄鏡形（敷石）住居址の分析、住居以外の遺構について分析を行い、どのような特徴及び傾向が把握できるのかを検討してきた。平成16年度は、これまでの研究に引き続き、集落構造・遺跡分布及び土器以外の遺物に関する研究・検討を行った。その結果どのような傾向が把握できるのか、以下各項目にしたがってその内容について提示していきたい。

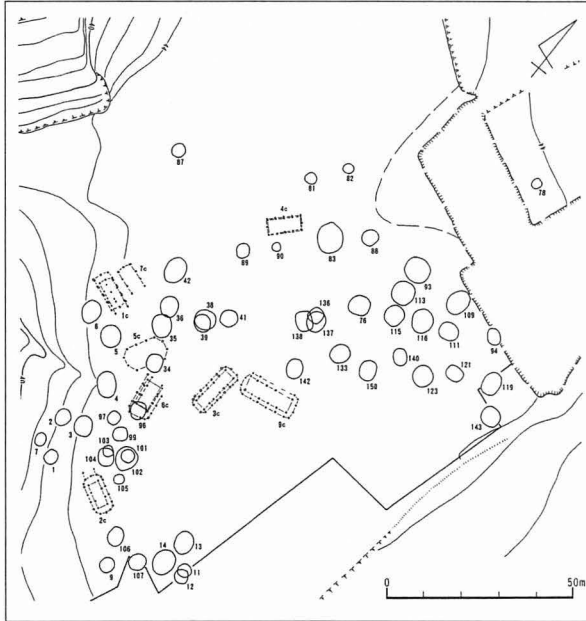
II. 集落構造

縄文時代中期は集落が最も発達した時期にあたる。これまでに縄文時代研究プロジェクトチームで集成してきたデータに基づいて、神奈川県内における住居件数の推移を見ていきたい。中期初頭五領ヶ台式期の遺構が発見された遺跡は129遺跡（井澤 1997）・住居55基（加藤 1997）であったが、中期中葉勝坂式期では153遺跡（小川 1998）・住居1439基（井辺 2000）を数え、今回集成を行った中期後葉加曽利E式期では、187遺跡・住居3035基（小川 2003）を数えた。この様に中期後葉期には住居件数が3000基を越えるまでに増えピークを迎えている事が把握できる。

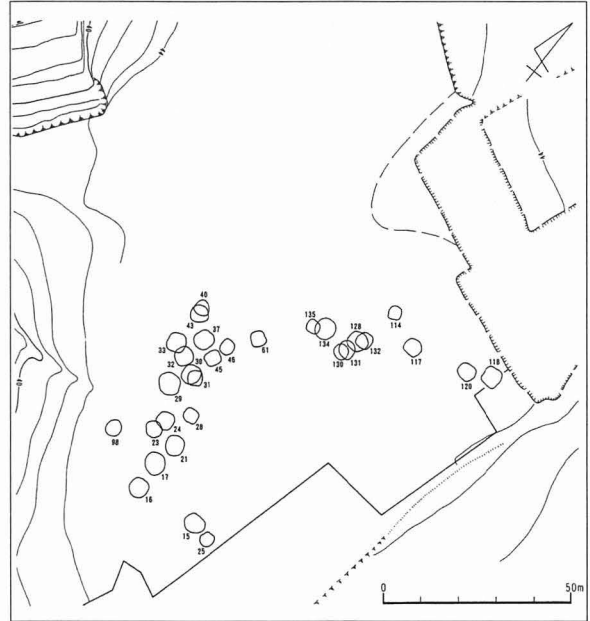
ここでは中期後葉期の集落構造について着目し、その様相を探ってみたい。しかしながら集落構造の把握には、ある程度遺跡全体の調査を行えたもの、さらに遺構などの遺存状態が良好で、帰属時期を明瞭にする出土遺物に恵まれていることなど条件的に制約があり、実際のところ現時点では困難な部分も多い。したがって膨大な集成資料のうち条件的にある程度遺跡の全体または主体的な部分が把握・概観できたと考えられる事例を任意で選択した。今回は、県東部の横浜市都筑区所在の大熊仲町遺跡、県央部の厚木市所在の恩名沖原遺跡、県北部の相模原市所在の山王平遺跡、城山町所在の川尻中村遺跡について概観したい。

大熊仲町遺跡（坂上 他 2000） 中期中葉～後葉の集落で、住居171基・掘建柱建物10棟・土坑135基・集石19基・埋甕3基・焼土1基・ピット群が発見されている。住居は標高43mの台地に円を描くよう分布し、内側に墓坑群が構築されている。集落の東側は調査区外であるため全体は明かでない。環状を呈する集落の西側部分が明らかになり、報告では加曽利E式期では各段階毎の具体的な変遷が示されている。土坑墓93基は加曽利EⅡ式期の所産として捉えられ、住居群内側に環状を呈するよう分布することから、特定の時期に濃密に構築されていることは注目できる。

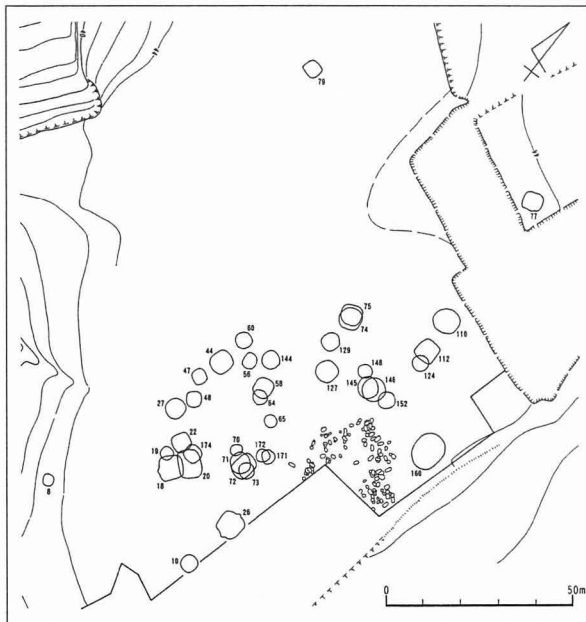
恩名沖原遺跡（迫 他 2000） 中期中葉～後葉の集落で、住居71基・集石23基・焼土址16基・埋設土器2基・柱穴列2基・土坑193基が発見されている。中期は7期の変遷が捉えられ、加曽利E式期は第6期・第7期にあたる。当該する16基の住居は、標高49mの台地に弧を描くよう分布し、勝坂式期住居よりも標高の高い部分に構築されている。集落の南側は比較的急峻な崖線を有し、集落のほぼ限界を示していると考えられる。土坑群は、第7期の住居群周囲に分布していることが特徴である。



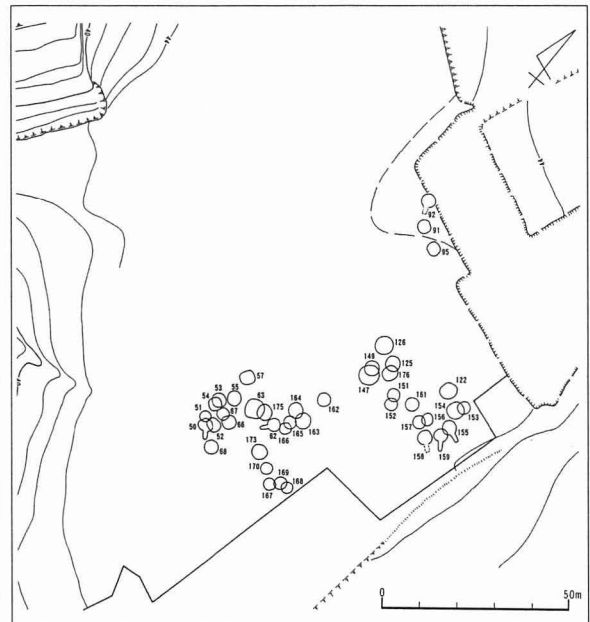
1. 勝坂式期遺構配置図



2. 加曽利 E I 式期遺構配置図



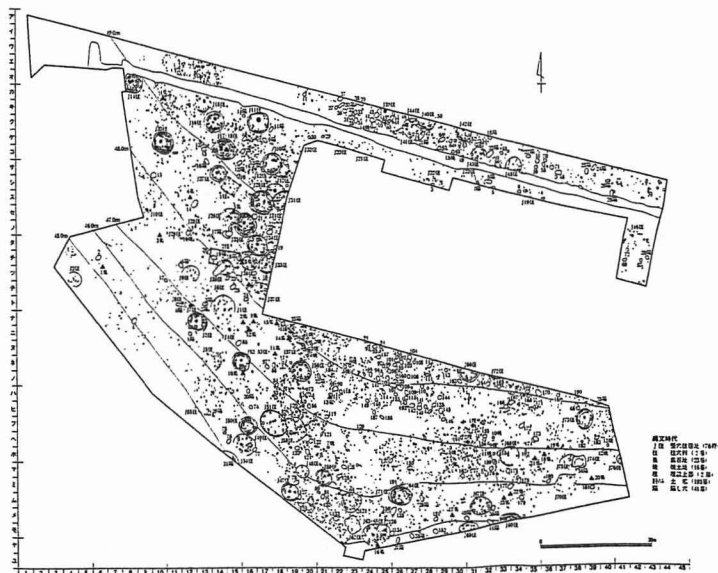
3. 加曽利 E II 式期遺構配置図



4. 加曽利 E II ~ III、III、IV 式期遺構配置図

第1図 横浜市 大熊仲町遺跡 遺構分布図（坂上 他 2000「大熊仲町遺跡」を一部改変）

山王平遺跡（戸田 他 1998） 加曽利 E 式期の竪穴住居57基・掘建柱建物5棟・集石6基・埋設土器3基・土坑109基が発見されている。集落は、5期の変遷が捉えられ、中期後葉段階のみの具体的な変遷が捉えられている。住居は、標高112mの台地に径90mの円を描くよう分布し、その内側に土坑群・掘建柱建物・ピット群などが構築されている。集落の北東側は比較的急峻な崖線を有し集落の限界をほぼ示していると考えられるが、集落の約半分が展開していると想定できる南東部などは調査区外で限界は明かでない。報告では特に第4期の住居を取り上げ、平面的にまとまった住居の単位（グループ）に着目し、集落構造分析のモデルとして提示し、具体的なデータで集団の動きを捉えていく可能性を示している。



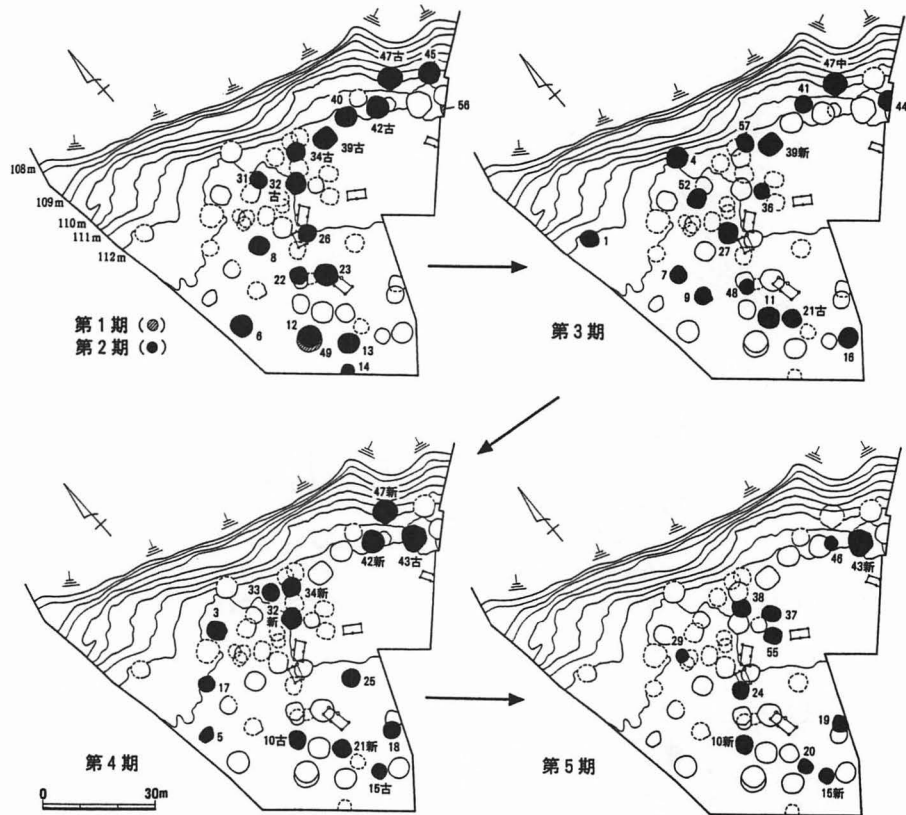
第2図 厚木市 恩名沖原遺跡 遺構全体図（迫 他 2000「恩名沖原遺跡」を縮尺改変）



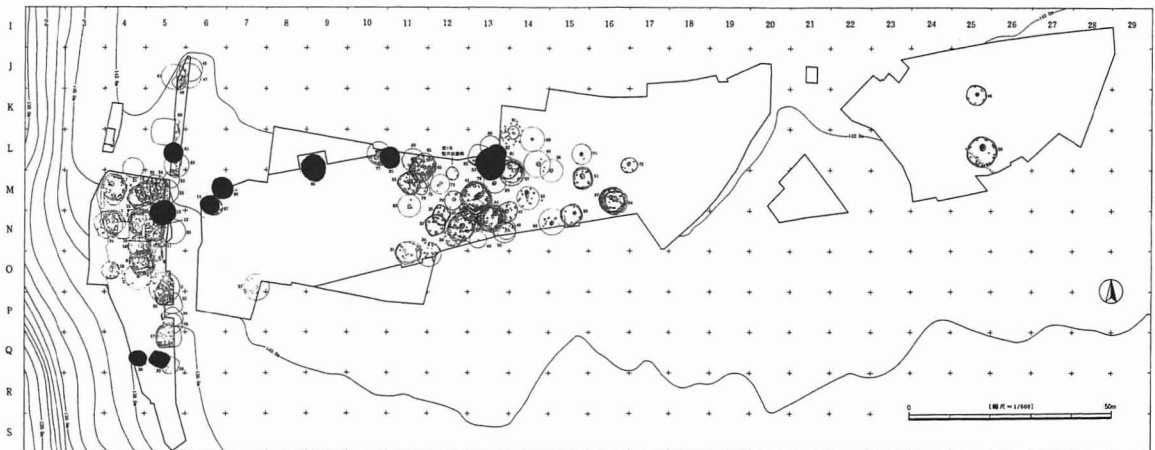
第3図 厚木市 恩名沖原遺跡 縄文時代集落変遷図（迫 他 2000「恩名沖原遺跡」を一部改変）



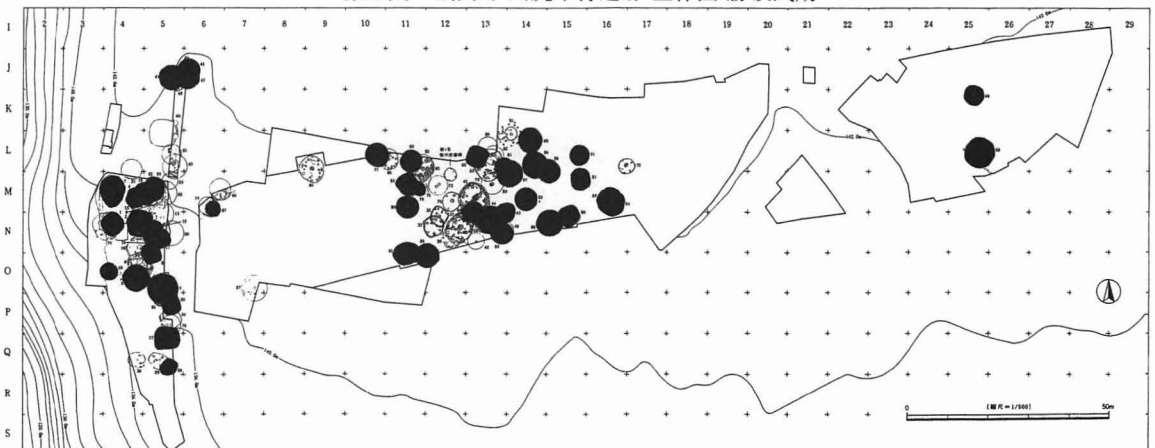
第4図 相模原市 山王平遺跡 遺構全体図（戸田 他 1998「山王平遺跡」を縮尺改変）



第5図 相模原市 山王平遺跡 集落変遷図 (戸田 他 1998「山王平遺跡」を縮尺改変)



第6図 城山町 川尻中村遺跡 全体図 勝坂式期



第7図 城山町 川尻中村遺跡 全体図 加曽利E式・曽利式期 (第Ⅲ段階～第Ⅳ段階・帰属時期不明なものは除く)



第8図 城山町 川尻中村遺跡 全体図 列石・配石・土坑・ピット

川尻中村遺跡（天野 他 2002） 中期中葉～後葉の集落で、住居91基・竪穴状遺構1基・列石1基・集石10基・焼土跡3基・埋設土器10基・土坑310基・ピット854基である。住居は標高140mの台地に円を描くよう分布する、いわゆる環状集落である。住居の時期は勝坂式期11基、帰属時期の決定が困難なものは28基で、52基が中期後葉期の所産である。時期不明住居も中期後葉期の所産に帰属するものが多いと考えられ、現状で70基以上、未調査区を含めると150基程度の広がりを持つと推察できる。勝坂式期住居は一部例外も認められるが、原則として約10～20m程度間隔をあけて点在する傾向が認められる。また加曽利E式期と同様に中央部には住居の構築されない空間が存在する。加曽利E式期では、環状集落中央部に径50m程度の住居の構築されない空間があり、その外側に50m程度の幅を持ちながら住居群が取り巻いている。住居の平面的な分布を見ると、大きく分けて①数基が著しく重複する住居群、②かなり近接してはいるもの隣接する住居と重複しない住居群、③環状集落から東側へ約90m以上離れて分布する住居の3種が認められる。住居群の内側には土坑墓と捉えられる土坑群が構築され、住居群と同様に径30m程度の円を描くよう環状に分布する。これら土坑墓群は均一的に分布するのではなく、南東部及びその対角線上にあたる北西部に著しく重複して集中する分布傾向が認められる。また住居群と土坑墓群の境界を示すよう列石が配されていることが本集落の最大の特徴となっている。以上のように代表的な集落を概観したが、中期集落は一般に勝坂式期から継続して営まれるものも多く、今回のように中期後半期に限定して捉えていくことは避けなければならない。また全体的に集落が極端に縮小していく傾向がある加曽利E式終末期では、後続する後期の様相を捉えた上で検討していくことが必要であり、加曽利E式の前後との関係や集落の具体的な変遷過程については今後の課題としたい。また、今回は各遺跡を単独で取り上げたが、川尻中村遺跡は原東遺跡・川尻遺跡との関係が深く、大熊仲町遺跡では港北ニュータウン地域での集落の在り方が提示（坂上 他 2000）されている。いずれも周辺及び地域に所在する遺跡との相互の深い関係が想定でき、総合的な視点からの検討が必要である。

（天野賢一）

Ⅲ．遺跡分布

ここでは、神奈川県内における中期後葉の主要な集落遺跡の分布を概観する。

第9図は、『研究紀要6・10』に掲載した「主要遺跡地名表」、「主要遺跡地名表（補遺）」をもとに、該期の主だった集落址を、40万分の1の地形区分図にプロットしたものである。掲載した該期の遺跡は、207遺跡を数える。市町村別の遺跡数は、横浜市に所在する遺跡が96遺跡と卓越し、以下、川崎市所在21遺跡、相模原市所在14遺跡、厚木市所在13遺跡、伊勢原市所在12遺跡、平塚市所在8遺跡、城山町所在5遺跡とつづく。

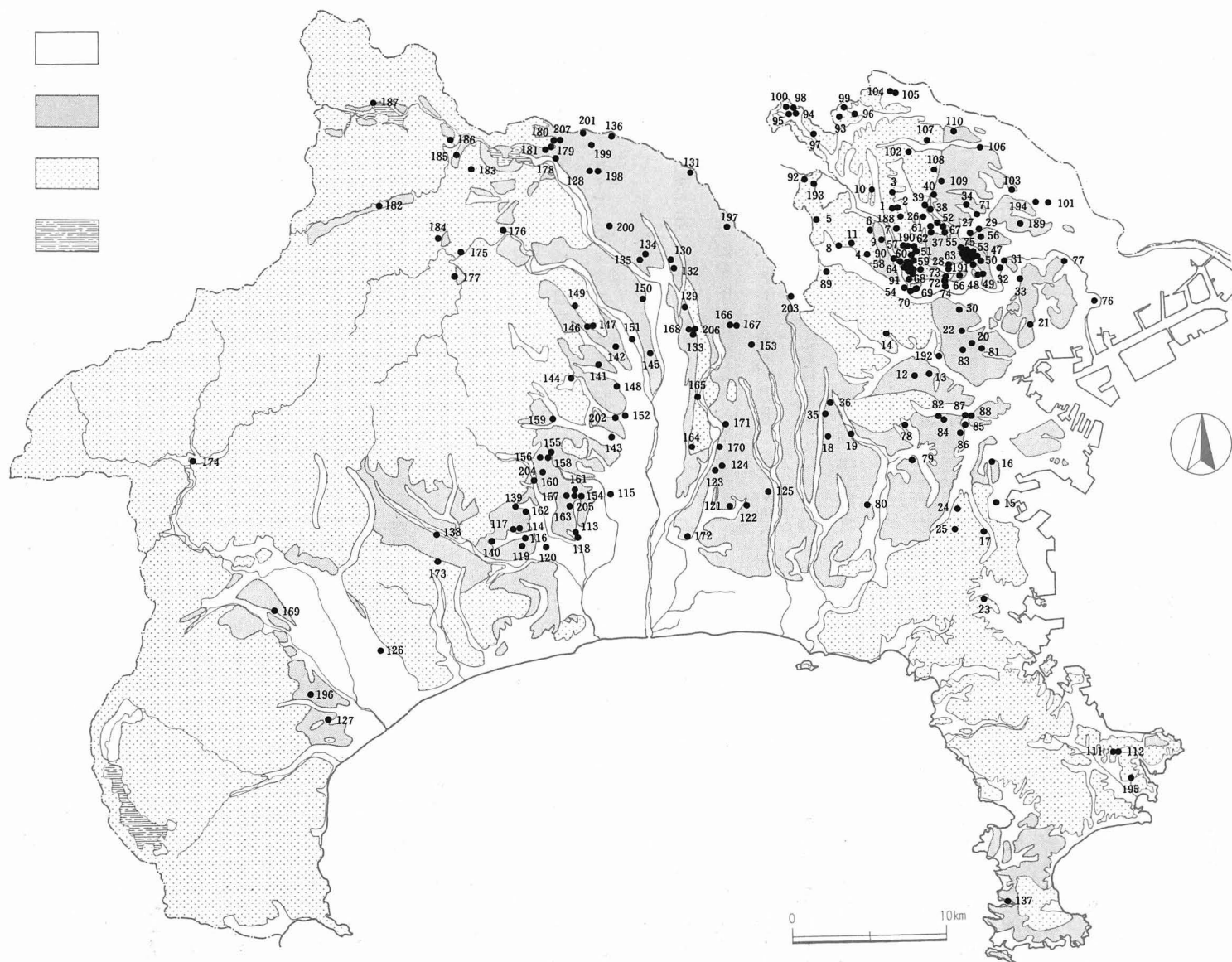
多摩川・鶴見川水系に挟まれた区域には、多摩丘陵とその南東縁に派生した下末吉台地が展開している。かかる地域の遺跡密集度は極めて高く、100ヶ所以上の集落遺跡が確認され、確実なものだけでも1,000軒以上の竪穴住居址が検出されている。また、都筑区所在の大熊仲町遺跡（50）・神隠丸山遺跡（55）・三の丸遺跡（64）・二ノ丸遺跡（73）等、大規模な環状集落が多数存在することも特筆に値し、該期においても県東部における中核的な地域といえよう。帷子川・大岡川流域、境川・柏尾川流域では、微増ではあるが遺跡数の増加が認められる。前者は下末吉台地南縁、後者は相模野台地東縁に相当する地域で、旭区所在の上白根おもて遺跡（14）、瀬谷区所在の阿久和宮腰遺跡（36）等、中期中葉期から継続する大規模集落の存在が知られているが、旭区所在の市ノ沢団地遺跡（13）、泉区所在の泉警察遺跡（18）等、各々の地域で、該期に至り現出する大規模集落も散見される。

相模川水系周辺では、相模原市所在の上中丸遺跡（130）・当麻遺跡（134）、寒川町所在の岡田遺跡（172）等、左岸域に展開する相模野台地上に立地する大規模集落を中心に安定的な遺跡分布が認められ、中葉期から引き続き、県央域における中核地となっている。また、城山・津久井町を中心とした上流域の段丘上に立地する集落遺跡の大規模化が顕著となり、城山町所在の川尻中村遺跡（179）、津久井町所在の大地開戸遺跡（182）・寺原遺跡（185）等、中流左岸域の大規模集落に匹敵する集落遺跡も現出する。県央域におけるあらたな中核地として認識されよう。

平塚市・秦野市・伊勢原市を中心とする金目川水系周辺域では、平塚市所在の原口遺跡（119）、伊勢原市所在の神成松遺跡（158）等、中期初頭段階から集落遺跡が散見されるが、中期中葉後半段階から集落遺跡の増加と集落の大規模化が顕在化し、該期に至り、大磯丘陵北東部とその縁辺に派生した台地上、伊勢原台地とその北西縁に展開する上粕屋扇状地上を中心に、その周辺部にまで集落遺跡の分布域が広がりを見せる。酒匂川水系周辺域は集落遺跡の数が少なく、現状では広範な分布の空白地が広がっているが、一方で、南足柄市所在の塚田遺跡（169）、山北町所在の尾崎遺跡（174）、小田原市所在の久野一本松遺跡（196）等、数十軒の住居で構成される大規模集落が存在していることも事実であり、箱根山地東縁に展開する丘陵を中心とする一帯が、県西部における中核地のひとつになる可能性も十分にある。

上述のごとく、該期の集落遺跡の分布状況は、多摩川・鶴見川水系流域を中心とした県北東部、および、相模川中流域を中心とした県央部における集中的な分布が看取され、概ね中期中葉期の遺跡分布状況を踏襲したものとなっているが、『研究紀要3』で小川の指摘した、「中期中葉期における遺跡数の増加、集落遺跡の大規模化」という傾向は、該期に至っても県内各地域で確実な伸展をみせている。特に、帷子川・大岡川流域の丘陵・台地上、境川・柏尾川水系流域の台地上、相模川水系上流域の段丘上、金目川水系周辺の丘陵・台地上等、中期中葉期の中核ともいえる地域の縁辺部において集落遺跡の増加が顕著であり、それに伴ってか、県内各地域で、集落遺跡の分布域が広範化する様相がみてとれる。

（井辺一徳）



第9図 縄文時代中期後葉における主要遺跡の分布

IV. 遺物

1. 土製品（第10図・第11図・第1表） 本項では土器片錘、土器片円盤、土偶、土製耳飾、ミニチュア土器及びその他の土製品について、非常に簡単であるが、その概要を記した。項目に挙げた土製品の多くは土偶を除いて属性に乏しく、以前本誌で設定した各段階（Ⅰ～Ⅳ）への比定が困難なものも多い。よって今回も勝坂式期と同様に当該期の遺構内から出土した土製品に限って取扱い、時期の特定については遺構内出土土器に拠った。ただし、これまでの研究成果などから明らかにこの時期のものではないものは除外した他、勝坂式期同様に土偶のようにある程度時期が特定し得るものについては遺構外資料も一部提示した。

土器片錘（1～5） 加曽利E式、曾利式両土器片とも使用されている。その形態は楕円形や長方形の土器片の長軸方向に浅い切れ目を加えているものが多い。稀に短軸に切れ目を入れるものや、長・短両辺の四箇所に切れ目を入れているものもある。土器片の使用部位や使用破片の縦横と取り方に顕著な傾向は見られない。また、土器片同士が接合する例もあり、横浜市道2号線No6地点103号住居址では一個体の口縁部片14点が錘に転用しているものもある（1.2）。時期については出土遺構から、Ⅱ段階・Ⅲ段階に多く、Ⅰ段階・Ⅳ段階には少ないという傾向が認められる。分布では当該期の遺跡が多い県北東部と西南部とで大きく異なり、前者に多く後者に少ないという傾向が窺える。なお、本期は勝坂式期と同様、石錘も存在している。

土器片円盤（6～11） 当該期の遺構から出土しているものは1364点に及ぶ。これら円盤の中には勝坂式土器を用いたものや無文で時期比定が難しいもの等もあり、勝坂式期か加曽利E・曾利式期のどちらの時期に製作されたものの判断は難しいものもあるが、勝坂式期と比較するとその数は明らかに増加している。形状はそのほとんどが円形・不整円形を呈し、その大きさは個々まちまちである。出土遺構から時期を見てみると遺構数の多寡とその傾向は一致し、Ⅱ段階・Ⅲ段階が多く、Ⅰ段階・Ⅳ段階は非常に少ない。

土偶（12～18） 当該期の遺構内出土土偶でも明らかに他の時期の所産されるもの（そのほとんどが勝坂式期）は除外し、遺構外でも当該期のものとされているものについては集計に加えた。その数は勝坂式期から大きく増加するが、遺跡規模に関わらず地域差や遺跡間の差が大きい。例えば橋本遺跡、上中丸遺跡、川尻中村遺跡等の県北西部の遺跡では数十点に及ぶ土偶が出土しているのに対して、港北ニュータウンに位置する大形集落である大熊仲町遺跡では一点も出土していない等、県東部における出土数は少ない。県内で出土した土偶は腕のみや胴部の一部等、全身の状態が不明なものを除くと、顔の表現が比較的明瞭で、どっしりと構えた脚部を有するもの（12、13）と頭部の作りが簡素で脚部が簡略化され、やや小振りなもの（14～17）に大別される。量的には後者が多い。製作時期については、その指標となりうる土器と文様構成が大きく異なるものが多く、細かい段階毎に比定することは難しいが、遺構出土の土偶から考えるとⅢ段階に多く、続いてⅡ段階が多い。Ⅳ段階のものは極めて少ないが、新戸遺跡では当該期の敷石住居址から顔の表現も胴部文様も失ったものが見つかった（18）。

土製耳飾（19～29） 数量的には前時期より微増しているが遺跡・遺構増加数から考える増加しているとは言いきれない。形状は、また臼形を呈し中央に穴を穿ったもの（19～22）と、鼓形もしくはスタンプ形を呈し、両面ないし片面に細かい刺突文を有するもの（24～27）が多い。また後者と同一形態を有するが文様を持たないもの（23）や片面に刺突文を、もう一面に沈線による渦巻文様の外周に刺突文を施文したもの（29）も認められる。貫通孔を有するものは勝坂式期から認められ、同時期のものが混在している可能性もあるが、出土した遺構の時期はⅡ段階からⅢ段階にかけてであり、遺構の構築時期に拠る限り、同形状の耳飾りは継続して作られたとも考えられる。後者については勝坂式期に類する資料はなく、時期的にはⅡ～Ⅲ段階に多

く認められる。他の形態では、楕円柱状の形態を持ち、片方の平坦面に隆起線文による渦巻文を横並び2つ描かれているもの(28)がある。なお、Ⅳ段階の発見例は見られない。分布は厚木市・相模原市・津久井郡の相模川中流域に多く、資料26点中24点が同地域から出土している。

ミニチュア土器(29~41) ここではいわゆる手捏土器・袖珍土器を含めた器高や最大径が約10cm程の大きさの小形土器を取り扱うこととする。これらは手捏で作成された粗雑且つ無文または単純な文様をもつものと小さいながらも丁寧に文様が施されているものの二種に大別される。時期的にはⅡ・Ⅲ段階に多く認められ、Ⅳ段階にも出土が認められるが一部(40)を除いて、そのほとんどは無文で、赤彩されている例もある(41)。形態もバラエティーに富んでおり、深鉢形や鉢形、高台のつくものなど様々である。段階毎の特徴は見受けられない。分布は橋本遺跡が極めて多く出土しているのをはじめ、圧倒的に県北西域に多い。

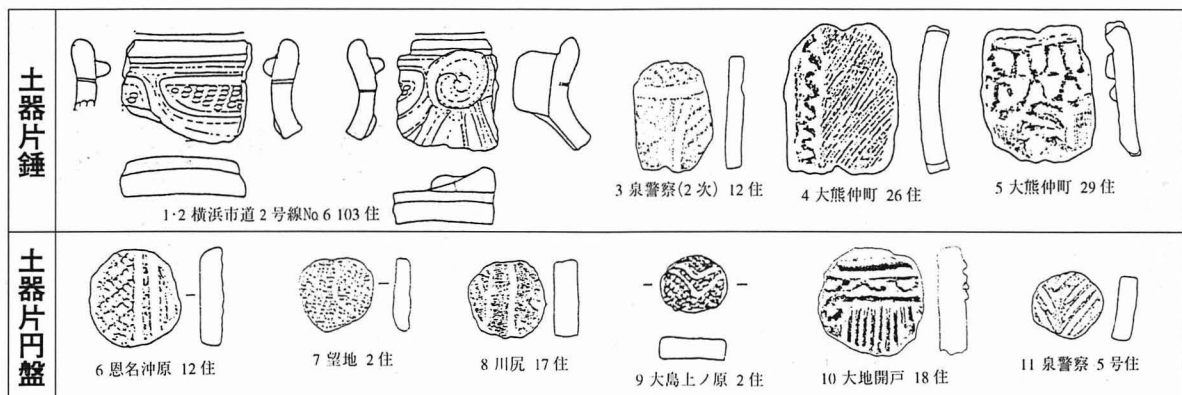
その他の土製品(42~49) 上記以外の土製品として遺構内からの出土に限って列挙しておく。土鈴は上白根おもて遺跡、上中丸遺跡、橋本遺跡、川尻中村遺跡(45他1点)の計5点、土製匙(42~44、葉積台遺跡)が4点、動物形土製品(46)、石皿形土製品(47)、俵形土製品の長軸に孔が穿たれている「有孔土製品」(48)、三角柱形土製品(49)、四角柱を呈する「立体土製品」(西之谷大谷遺跡)、土玉(上中丸遺跡)などが各1点見つかっている。なお、これらは形状を呈する土製品は神奈川県域の勝坂式期では発見されていない。

(井澤 純)

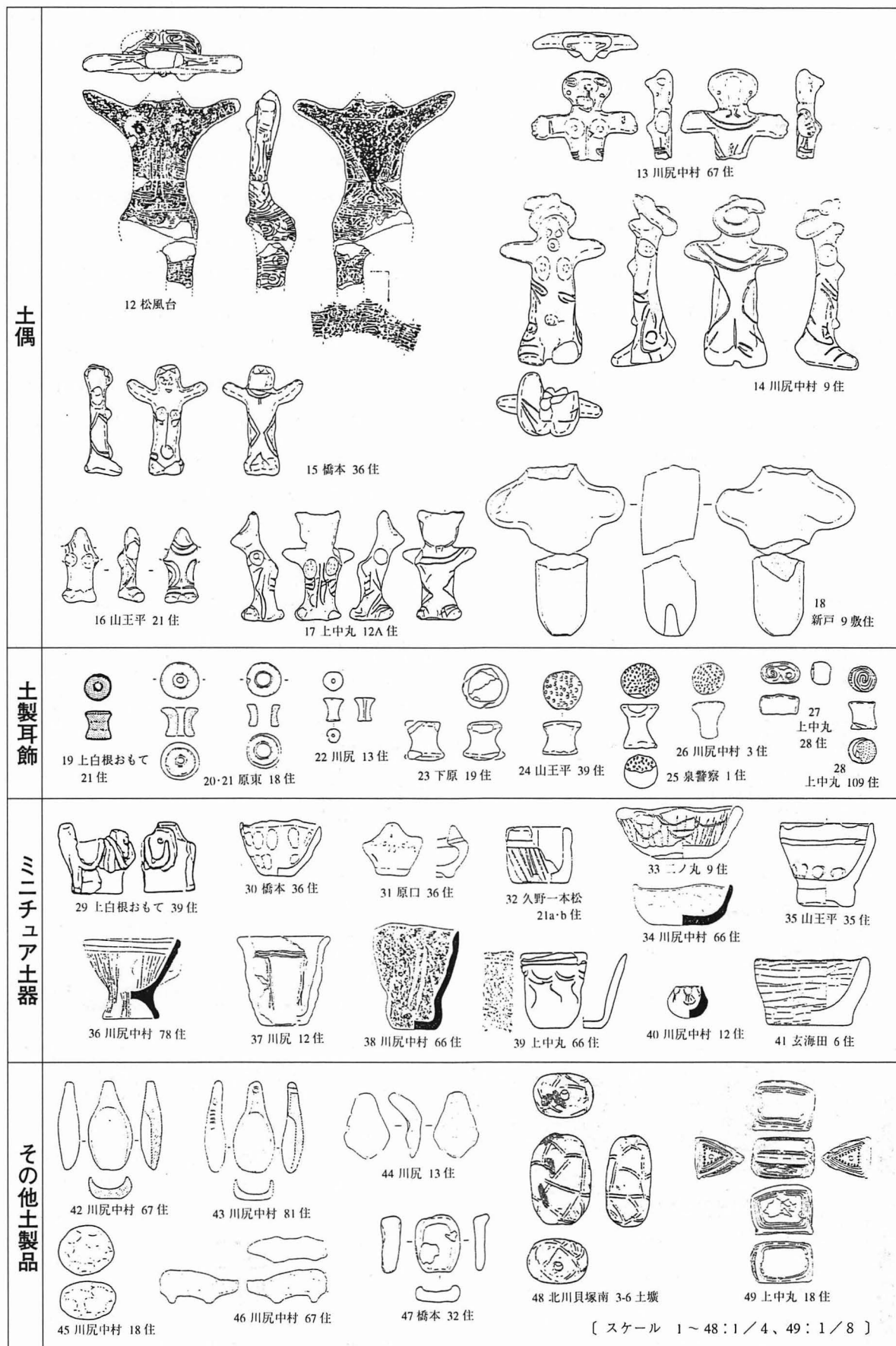
第1表 中期後葉期遺構内出土土製品一覧

遺跡No.	市町村	遺跡名	鉢	円盤	土偶	耳飾	ミチュア	その他	遺跡No.	市町村	遺跡名	鉢	円盤	土偶	耳飾	ミチュア	その他							
5	横浜市	受地だいやま			(2)		1		128	相模原市	大島上ノ原			1										
9	横浜市	中里					1		129	相模原市	勝坂			21										
11	横浜市	松風台			1	(4)			130	相模原市	上中丸	9	24	18(5)	6	21	3							
13	横浜市	市ノ沢団地	8	146			1		131	相模原市	山王平	2	18	8	1	16								
14	横浜市	上白根おもて		107			1	4	132	相模原市	下原	2	8	(1)	1	3								
18	横浜市	泉警察	10	33			1	1	133	相模原市	新戸	1	44	2(1)	2	3								
22	横浜市	羽沢大道		2				2	134	相模原市	当麻		57	2	4	11								
31	横浜市	豊屋の上	6	13					136	相模原市	橋本		43	18(15)	1	92	3							
34	横浜市	山田大塚	2	1					201	相模原市	相原八幡前			3		2								
50	横浜市	大熊仲町	191	161					138	秦野市	今泉峰B地区					1								
56	横浜市	北川貝塚南		10				1	139	秦野市	鶴巻上ノ窪			18										
73	横浜市	二ノ丸			(4)		3		145	厚木市	下依知大久根			29										
76	横浜市	梶山	12						146	厚木市	中荻野稲荷木第20-D区			29										
81	横浜市	帷子第Ⅱ地点					1		147	厚木市	中荻野成井田			7										
88	横浜市	横浜市道2号線6地点	64	19					150	厚木市	溝野日影坂上	1	9	1(1)	1	1								
89	横浜市	玄海田		1				1	202	厚木市	恩名沖原			19	(1)									
90	横浜市	西之谷大谷(※)						1	156	伊勢原市	御伊勢森			9										
189	横浜市	下田西	5						157	伊勢原市	粕上原			2										
190	横浜市	高山	1	3					158	伊勢原市	神成松			3										
192	横浜市	南原	2						159	伊勢原市	下北原	1												
93	川崎市	金程向原	1						160	伊勢原市	坪ノ内・貝ヶ窪			3										
97	川崎市	葉積台						1	165	海老名市	望地			2										
98	川崎市	宮添		2	1		1		174	山北町	尾崎			15		1								
99	川崎市	向原土地区画整理地内		1					178	城山町	川尻			46	1(2)	1	9	1						
107	川崎市	瀬見台		2					179	城山町	川尻中村			205	24(15)	3	23	5						
119	平塚市	岡上ー4第2地点		8					181	城山町	原東	1	23	1	3	2								
194	平塚市	原口	19	11	1		5		207	城山町	向原中村・向原下村						1							
122	藤沢市	西部216地点	1	4					182	津久井町	大地開戸	2	169											
123	藤沢市	用田鳥居前					1		185	津久井町	三ヶ木		8		1									
124	藤沢市	藤沢市322	12	14					合 計 数									355	1364	80(51)	26	214	14	
196	小田原市	久野一本松	1	12			1		注：(※)の遺跡出土土製品は出土位置が特定できたもののみを掲載。土偶欄の括弧は遺構外を示す。															

注：(※)の遺跡出土土製品は出土位置が特定できたもののみを掲載。土偶欄の括弧は遺構外を示す。



第10図 加曽利E式・曾利式期の土製品(1)



第11図 加曽利E式期の土製品 (2)

2. 石器（第12図）

ここでは加曽利E式期・曾利式期の石器について述べる。第12図は代表的石器資料である。掲載にあたっては、時期的に各段階（Ⅰ～Ⅳ段階）単純時期と考えられる遺構出土資料から構成されるようにした。またⅠ・Ⅲ段階は神奈川県東部の資料、Ⅱ・Ⅳ段階は同中部・西部の資料を配置した。各遺跡または各遺構出土石器資料にみる石器各器種の存在比率は提示する必要があったが、各資料毎でばらつきが大きいと思われたため、今回は提示しなかった。

石鏃（1～4） 各段階通じて基本的に凹基無茎鏃（2～4）がほとんどである。全体形は二等辺三角形をなすもの・正三角形に近いものなどがあり、エッジ部分も直線的なもの、やや膨らむもの（4）、軽く凹むもの（3）などがある。平基無茎鏃は少量。1は柳葉形（菱形）をなすものであるが、稀な例であろう。有茎鏃はまだ一般化していないようである。石材は黒曜石が圧倒的に多く、他はチャート等が少量ある程度である。出土量を見ると各遺跡・遺構で比較的遍く出土する。遺構によっては石鏃を多出する例（上中丸遺跡41号住居址・大地開戸遺跡J18号住居址）があり、石鏃の集中管理も行われていたことが推測される。

石錘（5～7） 石錘は扁平・楕円形の礫を素材とし、その縁に、対角線上に、紐掛け用の打ち欠きを施したものの。打ち欠きは2個のものが普通で、4個のものは少ない。礫自体の凹みを利用し、打ち欠きを一部省略したものもある。打ち欠きが2個のものでは打ち欠きを礫の長軸に施したもの（6・7）と、短軸に施したもの（5）がある。出土量は多くはなく、出土しない遺跡の方が多いほどである。出土遺跡を見ると海浜部の遺跡も内陸部・山間部の遺跡もある。用途については漁網錘と編み物石という両説があるが、漁網錘とすれば、海のみならず、川での使用もあったと考えることができる。また漁労具に関しては、他に軽石製の浮子が少量出土している。

敲石・磨石・凹石（8～11） 河川や海浜に存在するような円礫のうち、片手で握れる程度の大きさの礫を用い、その表面に人為的な敲打痕をもつものを敲石、磨耗痕をもつものを磨石（9）と呼ぶが、両者をあわせても資料（8）も多数存在する。素材の礫は長楕円形（8）、扁平楕円形（9・10）、円形などがあるが、磨石では使用のため縁が直線状に変形し、著しいものでは石罅状になったものもある。敲石では棒状礫の先端に敲打痕をもつものも多い。また円形や楕円形の礫の中央が敲打により深く凹んだものは凹石と言う。出土量を見ると各遺跡・遺構で多く出土し、本時期の代表的器種の一つとすることができる。用途は植物質食料の加工が考えられる。また尾崎遺跡などではハンマーストーンや砥石と報告されたものがあり、同報告書ではこれらを磨製石斧の製作工具として積極的に評価している。

台石・石皿（12～15） 大形で扁平な石を素材としたものに台石・石皿がある。表面に使用による磨耗痕が明瞭なものを石皿（12～15）、明瞭でないものを台石と言う。石皿で磨耗が著しいものは、器体中央が皿状に凹んだりする（14・15）。表面には敲打による凹みをもつものがあり（13）、その凹みが多いものは多孔石に分類されることがある。石材は安山岩・凝灰岩・閃緑岩などがある。出土量を見ると各遺跡・遺構でしばしば出土するが、特に石皿はⅣ段階に、その破損したものが敷石住居址の敷石や縁石に再利用されることがよくある。用途は植物質食料の加工が考えられるが、磨耗痕の顕著でない台石はそれ以外の多様な用途も考えられる。多孔石は発火具との説もある。

打製石斧（16～25） 片手で持てる程度の大きさの扁平な石器素材に剥離加工を施して作った、平面形が縦長で（柄への装着が可能で）、尖った刃部をもつ石器。素材に着目すると、礫から剥ぎ取った扁平な剥片を素材としたものと、扁平な礫そのものを素材としたものがある。剥片を用いたものは数多く存在し、側縁・

刃部ともに入念に加工が施されるのが普通である。しかし剥片の縁自体が刃として利用可能なものでは刃部より側縁加工が入念に行われることがある(18・24)。一方扁平な礫を用いたものは礫斧とも呼ばれ、礫器に含めて報告されることもある。平行する側縁をもつ礫を素材としたものでは、側縁加工はさほど施す必要がなく、刃部加工を行っただけで石器となったものがある。本時期の打製石斧は断面形が扁平気味のものが多く、平面形を見ると、側縁が平行するもの(16～19)、側縁が末広がりを開くもの(22～25)、側縁が弧状のもの、その中間的なものなどがある。基部の形状も直線的なもの、丸味を帯びたり鈍く角ばるもの、細く尖るものなどがあり、側縁が平行で基部も直線的なものは短冊形(17)をなす。また側縁が開くもので基部が直線的なものは撥形(23)、基部が尖るものは三角形(トランシェ形)(25)をなす。刃部は弧状をなすものが多い(16～22・24・25)が、直線的なもの(23)もある。側縁は柄への装着のため、えぐりの入れられたものも多い。18・22のような浅いえぐりのものは多くのものに見られ、中には20・24のようにえぐりのやや深いものがある。このえぐりのやや深めなものは分銅形打製石斧の出現の母体と考えられ、えぐりが深く、かつえぐりをはさんで上下に対称的な大きさの器体をもつように作出されれば、分銅形打製石斧(21)が完成する。本県では分銅形打製石斧の安定的出現はⅣ段階からと考えられる。石材はホルンフェルス・凝灰岩・砂岩が多い。出土量を見ると、出土石器中で最多量を占める場合も多く、磨石と共に、本時期最も多く製作された石器とすることができる。用途は土掘り具・伐採具と考えられる。この他、平面形からして柄への装着は難しいが、礫や礫素材剥片の周縁に剥離加工を施した礫器もわずかながら存在する。

磨製石斧(26～32) 本時期の磨製石斧は器厚が厚手のものと、薄手のものに分けられる。厚手のものでは断面形が円形・楕円形をなす乳房状磨製石斧(26～29)が典型的で量も多い。乳房状磨製石斧は入念に研磨されたもの(26・28)もあるが、側縁や器表裏面に剥離加工や敲打痕をもつもの(29)がある。中には研磨痕の下地に剥離加工や敲打痕が残るものもあることから、乳房状磨製石斧は研磨以前に剥離・敲打調整という製作工程をとることが想定され、尾崎遺跡などでは未製品と考えられるものも出土している。また剥離により器体を成形し、刃部のみ研磨した局部磨製石斧もある。一方薄手のものでは扁平な礫や剥片を素材とし、剥離と研磨によって石斧を作ったもの(30)が多いが、敲打を伴うのものもある。また研磨を全面的に施し、側縁を平坦に面取りした定角式磨製石斧もしばしば見られる。磨製石斧の石材は凝灰岩・輝緑岩・蛇紋岩・はんれい岩などが多い。出土量は打製石斧ほどは多くはないが各遺跡で一定量は存在する。磨製石斧の中では乳房状磨製石斧が全段階通じて量的に多い。定角式磨製石斧は乳房状磨製石斧ほど量は多くはないが本県の場合、Ⅲ・Ⅳ段階に量的増加が見られるようである。用途は木材の伐採具と考えられる。

石匙・スクレイパー(33・34・36・37) 剥片を素材とし、抉りを入れてつまみ部を作出した石匙は、本時期では横形のものがほとんどである(36・37)。大きさは小形のものと大形のものがある。小形のものは剥離が細かく、石材はたいてい黒曜石を使用する。一方大形のものは剥離がやや粗雑で、石材は黒曜石以外のものも多い(36)。またこの他各種スクレイパー(33・34)も存在する。これらの石器は各遺跡でしばしば出土するが、量的には多くはない。

石錐(35) 剥片の先端に剥離を加え、尖った先端部を作出したもの。長細い先端部と膨らんだつまみ部をもつもの、不定形な剥片の一角に先端部を作出したもの(35)、細い棒状のものなどでさまざまなバリエーションが存在する。石材は小形のものでは黒曜石が多い。

楔形石器・石核 上記の器種の他に、楔形石器や石核などが存在する。

(松田光太郎)

	狩猟具	漁労具	植物加工具	土掘り・伐採具	伐採具	加工具
	石鏃	石錘	磨石・敲石・凹石・石皿類	打製石斧	磨製石斧	石匙・石錐他
I 段階	 1 大熊仲町 113住	 5 下田西 J 1 住	 8 山田大塚 1 住 12 山田大塚 1 住	 16 山田大塚 1 住 22 宮添 E 7 住	 26 宮添 E 7 住	 33 大熊仲町 113 住 34 大熊仲町 113 住
II 段階	 2 大地開戸 J 4 住	 6 原口 J 14 住	 9 大地開戸 J 4 住 13 大地開戸 J 4 住	 17 大地開戸 J 4 住 23 大地開戸 J 4 住	 27 原東 19 住 30 原東 19 住	 35 大地開戸 J 4 住 36 粕上原
III 段階	 3 市ノ沢団地 C 5 住		 10 市ノ沢団地 C 5 住 14 市ノ沢団地 B 13 住	 18 市ノ沢団地 B 13 住 20 市ノ沢団地 B 13 住 24 市ノ沢団地 B 13 住	 28 市ノ沢団地 D 19 住 31 市ノ沢団地 C 5 住	 37 大熊仲町 J 145 住
IV 段階	 4 尾崎 11 住	 7 尾崎 11 住	 11 尾崎 11 住 15 尾崎 11 住	 19 尾崎 11 住 21 新戸 J 4 敷石 25 尾崎 11 住	 29 新戸 J 4 敷石 32 尾崎 11 住	

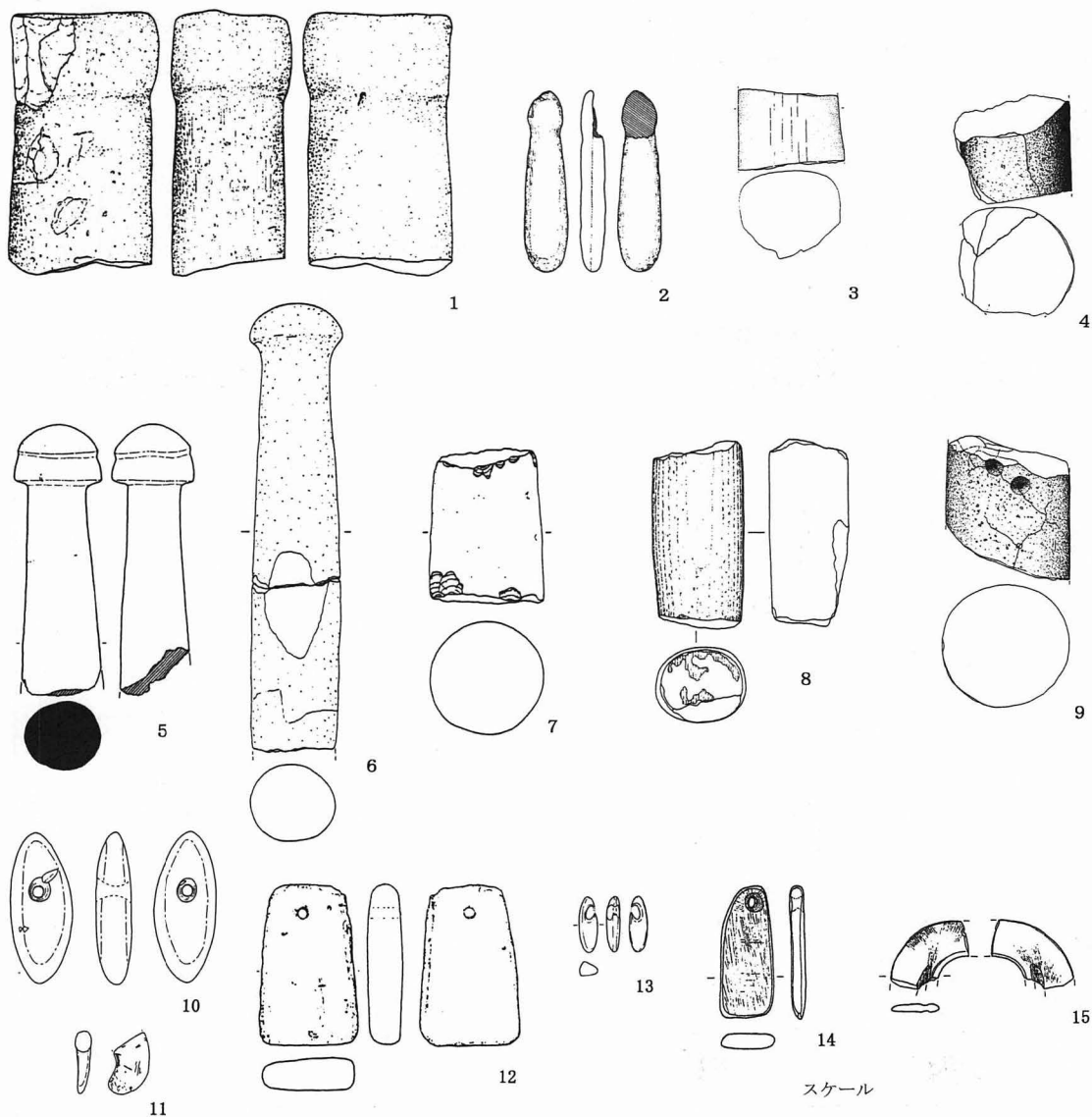
第12図 加曾利 E 式・曾利式期の石器 (1/5)

3. 石製品 (第13図)

本項では、加曽利E式期・曽利式期の石製品について非常に簡単にではあるが概要を記した。当該期の石製品には、石棒、垂飾などの装身具が挙げられるが、それぞれ属性に乏しく、編年案の各段階（Ⅰ～Ⅳ）への設定が困難なため、遺構外出土の遺物は除外し、当該期の遺構から出土した石製品のみを取り扱うこととした。また、編年案の各段階への比定は遺構内から出土した土器を基準にした。

石棒 当該期の石棒は、横浜市道2号線№6遺跡11号住居址（1）、上白根おもて遺跡11号住居址（2）、岡上-4遺跡第2地点J-6号住居址（3）、羽沢大道遺跡4号住居址（4）、稲ヶ原遺跡A地点B-1号住居址（5）、新戸遺跡J-9号敷石住居址（6）、青野原バイパス関連遺跡大地開戸遺跡J24号配石（7）、井田中原遺跡B地点JT-1、高山遺跡18号住居址（8）、二ノ丸遺跡J66号住居址、同遺跡J96号住居址（9）等から出土している。時期は、遺構からの出土土器からⅡ～Ⅳ段階に比定される。特に、Ⅳ段階にかけて出土例が増加する傾向が認められる。

装身具 当該期の垂飾は、市ノ沢団地遺跡D地区第14号竪穴住居址（10）、下原遺跡第17号住居址（11）、宮



第13図 加曽利E式・曽利式期の石製品

添遺跡D-29号住居址（12）、相原八幡前遺跡第5地点第1号住居址（13）、二ノ丸遺跡J70号住居址（14）、同遺跡J92号住居址（15）等から出土している。時期は、Ⅱ～Ⅲ段階に比定される。下原遺跡第17号住居址と二ノ丸遺跡J92号住居址出土の遺物は、块状耳飾りの欠損品で、その他の遺物は、大珠などである。

以上のように石棒、装身具について概要を記したが、これらの遺物出土例の多くが遺構外からの出土であることなどから、当該期に属している石製品の多くを見落としている可能性は高いと考えられる。（岡 稔）

神奈川県内 中期後葉土器出土主要遺跡地名表（補遺）

- (1) この表は平成13年度刊行した「神奈川県における縄文文化の変遷Ⅵ－中期後葉 加曽利E式土器の様相 その1」（2001 研究紀要6）に掲載できなかった遺跡文献のうち、今回の諸論に関わるもののみを抽出して掲載したものである。
- (2) 掲載基準および様式は前回は踏襲している。
- (3) 作成にあたってはプロジェクトメンバーが分担して集成し、データベース化した。なお、表の編集は小川が担当した。

遺跡No.	遺跡名	住居数	所在地	文献No.
横浜市都築区				
73	二の丸遺跡	73	池辺町865	204
74	前高山北遺跡	1	池辺町390外	186
平塚市				
116	真田・北金目遺跡群	1	真田・北金目	188
119	原口遺跡	39	上吉沢1617外	196
藤沢市				
123	用田鳥居前遺跡	2	用田647他	197

遺跡No.	遺跡名	住居数	所在地	文献No.
小田原市				
126	千代東町遺跡	1	千代東町209-2他	198
相模原市				
129	勝坂遺跡	6	磯部字勝坂	178
136	橋本遺跡	1	橋本	179
城山町				
178	川尻遺跡	(2)	川尻字谷ヶ原769-1	184・185
179	川尻中村遺跡	80	川尻字向原1269他	202

遺跡No.	遺跡名	住居数	所在地	文献No.
横浜市青葉区				
188	寺下遺跡	1	大場町103-1	203
横浜市港北区				
189	下田西遺跡	2	下田町2-848-1	191
横浜市都築区				
190	高山遺跡	12	高山4	207
191	上台の山（大熊9）遺跡	3	仲町台3-12	192
横浜市保土ヶ谷区				
192	南原遺跡	3	川島町973他	193・194・195
川崎市麻生区				
193	岡上-4遺跡	13	岡上字栗畑793	187
川崎市中原区				
194	井田中原遺跡	1	井田1485-1他	205
横須賀市				
195	江戸坂貝塚	—	久比里2-392他	174・175
小田原市				
196	久野一本松遺跡	30	久野1282他	199

遺跡No.	遺跡名	住居数	所在地	文献No.
相模原市				
197	相模原市No.76遺跡		古淵4	176
198	相模原市No.69遺跡	2	大島字下台983-1	177
199	相原森ノ上遺跡	1	相原5-486-1他	189
200	田名塩田遺跡群	1	田名字向原10826他	190
201	相原八幡前遺跡	2	相原4-190他	200・201
厚木市				
202	恩名沖原遺跡	19	恩名沖原	180
大和市				
203	大和市No.1遺跡	1	下鶴間1-37-1他	181
伊勢原市				
204	三ノ宮・下谷戸遺跡	11	三ノ宮字下谷戸1100他	182
205	池端・椿山遺跡	5	池端242他	208
座間市				
206	米軍キャンプ座間地内遺跡	2	米軍キャンプ座間地内	183
城山町				
207	向原中村遺跡	1	川尻字向原1267-1他	206

文献一覧（表中文献Noと一致）

- 174 1998 横須賀市人文博物館 『考古資料図録ⅢⅢ』 横須賀市人文博物館
- 175 1999 横須賀市人文博物館 『考古資料図録ⅣⅣ』 横須賀市人文博物館
- 176 1999 境 雅仁 『相模原市No.76遺跡－（仮称市営古淵住宅建替事業に伴う調査－） 相模原市遺跡調査会調査報告1 相模原市遺跡調査会
- 177 2000 香村紘一 『相模原市No.69遺跡』 相模原市埋蔵文化財調査報告 24
- 178 2000 山田不二郎 『勝坂遺跡54次調査－市道磯部47号改良工事に伴う調査報告－』 相模原市遺跡調査会調査報告2 相模原市遺跡調査会
- 179 2000 河本雅人 『埋蔵文化財発掘調査概報集－橋本遺跡8次調査』 相模原市埋蔵文化財調査報告 24
- 180 2000 戸田哲也ほか 『神奈川県厚木市恩名沖原遺跡発掘調査報告書』 恩名沖原遺跡発掘調査団
- 181 2000 相原俊夫 『大和市No.1遺跡第2次調査 深見神社北遺跡第4次調査 神明若宮遺跡自然化学分析篇』 大和市文化財調査報告書 第74集 大和市教育委員会
- 182 2000 穴戸信悟ほか 『三ノ宮・下谷戸遺跡（No.14）Ⅱ 第一東海自動車道（東名高速道路）厚木～大井松田間拡幅工事に伴う調査報告17－伊勢原市内－』 かながわ考古学財団調査報告 76（財）かながわ考古学財団
- 183 2000 戸田哲也ほか 『神奈川県座間市米軍キャンプ座間地内遺跡発掘調査報告書』 米軍キャンプ座間地内遺跡発掘調査団
- 184 2000 加藤勝仁ほか 『川尻遺跡Ⅱ－谷ヶ原浄水場内事業に伴う発掘調査－』 かながわ考古学財団調査報告 69（財）かながわ考古学財団
- 185 2000 山本暉久ほか 『国指定史跡川尻石器時代遺跡範囲確認調査報告書』 神奈川県教育委員会・城山町教育委員会・（財）かながわ考古学財団
- 186 2001 石井 寛 『前高山遺跡 前高山北遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告29（財）横浜ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会
- 187 2001 呉地英夫ほか 『岡上－4遺跡第2地点 発掘調査報告書』 岡上－4遺跡発掘調査団
- 188 2001 若林勝司ほか 『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書2－平塚都市計画事業真田・北金目特定土地区画整理事業に伴う調査報告－』 真田・北金目遺跡調査会、都市基盤整備公団
- 189 2001 香村紘一 『神奈川県相模原市相原森ノ上遺跡』 相模原市相原地区遺跡調査団・相模原市相原5丁目土地区画整理組合
- 190 2001 麻生順司ほか 『田名塩田遺跡群Ⅱ発掘調査報告書』 田名塩田遺跡群発掘調査団
- 191 2002 吉田浩明 『下田西遺跡発掘調査報告書』 下田西遺跡発掘調査団
- 192 2002 坂上克弘 『上台の山遺跡』（財）横浜ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 193 2002 戸田哲也ほか 『横浜市保土ヶ谷区南原遺跡発掘調査報告書』 県営南原団地内遺跡発掘調査団
- 194 2002 小川岳人ほか 『南原遺跡－県営南原団地建設に伴う発掘調査－』 かながわ考古学財団調査報告 129（財）かながわ考古学財団
- 195 2002 橋本昌幸ほか 『南原遺跡発掘調査報告書－（仮称）南原連絡道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』 横浜市道路局・財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 196 2002 長岡文紀 『原口遺跡Ⅲ 縄文時代－農業総合研究所建設に伴う発掘調査－』 かながわ考古学財団調査報告134（財）かながわ考古学財団
- 197 2002 栗原伸好ほか 『用田鳥居前遺跡－県道22号（横浜伊勢原線）道路改良事業（用田バイパス建設）に伴う発掘調査－』 かながわ考古学財団調査報告 128（財）かながわ考古学財団
- 198 2002 諏訪問順ほか 『平成9年度小田原市緊急調査報告書5 平成9年度範囲確認調査』 小田原市文化財調査報告書 第81集
- 199 2002 戸田哲也ほか 『久野諏訪ノ原遺跡群Ⅰ 久野一本松・久野天野藪・久野坂下窪遺跡』 市道0036号道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査 小田原市文化財調査報告書 第101集 小田原市教育委員会
- 200 2002 土井永好ほか 『相原八幡前遺跡第5地点』 相模原市埋蔵文化財報告 第29集 相模原市教育委員会
- 201 2002 香村紘一 『神奈川県相模原市相原八幡前遺跡』 相模原市相原地区遺跡調査団
- 202 2002 天野賢一ほか 『川尻中村遺跡－県道510号（長竹川尻線）新小倉橋新設事業に伴う調査報告2－』 かながわ考古学財団調査報告 133（財）かながわ考古学財団
- 203 2003 渡辺務 『横浜市青葉区寺下遺跡』 日本竊史研究報告 第60冊 日本竊史研究所
- 204 2003 小宮恒雄ほか 『二ノ丸遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 34（財）横浜ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 205 2003 北原實徳ほか 『井田中原遺跡B地点』 井田中原遺跡B地点発掘調査団
- 206 2003 山田仁和ほか 『向原中村遺跡・向原下村遺跡－城山町川尻向原土地整理事業地内遺跡の発掘調査－』 城山町川尻向原土地整理事業地内遺跡発掘調査団
- 207 2004 石井 寛 『高山遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告（財）横浜ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 208 2004 井辺一徳ほか 『池端・椿山遺跡緊急地方道路整備事業（主要地方道路横浜・伊勢原線）に伴う発掘調査 かながわ考古学財団調査報告 165（財）かながわ考古学財団